

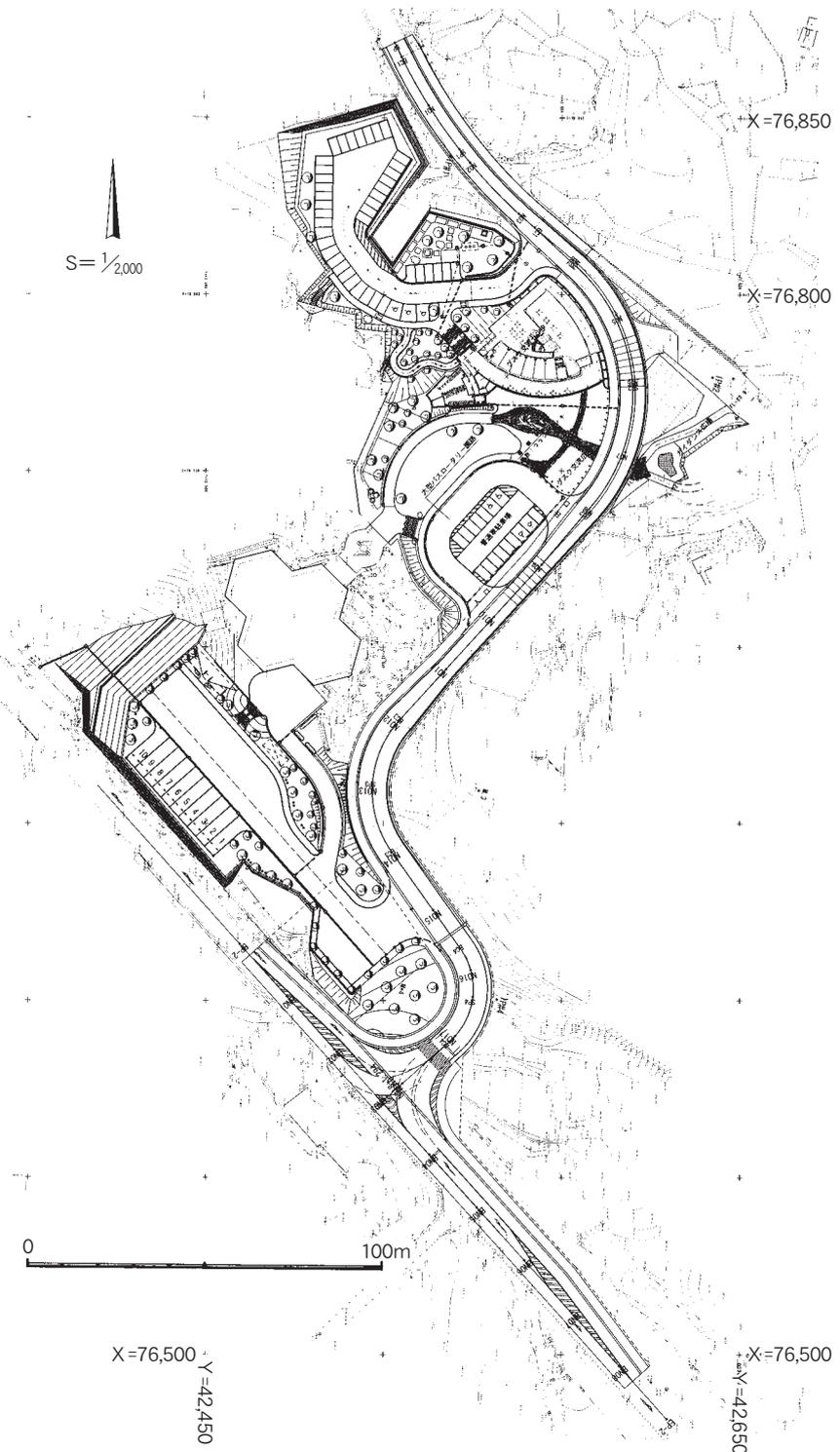
## 第Ⅱ章 調査に至る経緯

### 第1節 今帰仁城跡周辺整備事業の概要

今帰仁城跡は2000年12月に「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録された。登録以前より村では城下一帯を「今帰仁城跡公園」として位置づけ、周辺地域の環境整備を行うことを計画していた（今帰仁村教育委員会1992）。登録を契機に、今帰仁城跡を活用する為駐車場、交流センター、券売所、トイレなど諸便益施設の整備について具体的に検討を行った。検討作業は平成13年度に「今帰仁城跡周辺整備事業計画策定事業」として専門の委員会を立ち上げ14年3月には計画書を策定した（今帰仁村教育委員会2002）。次年度の平成14年度から今帰仁城跡周辺整備事業（以下、周辺整備）として駐車場をはじめとした便益施設を施工することとなった。

周辺整備における施設の概要と配置について第4図に示した。

しかし、当地は埋蔵文化財包蔵地として周知されており、特に世



第4図 今帰仁城跡周辺整備事業の施設配置図

界遺産の登録に伴って今帰仁城跡への関心が高まっている。当然今帰仁城下に展開する集落に関しても、これまでより一層の関心と歴史的価値をもって整備されるべきであるとの考え方があった。このような環境下での整備着手となり、今帰仁城跡調査研究整備委員会などをはじめとした関係機関との綿密な調整を行い、最終的には西区とした地域一帯に便益施設を配置する計画となり、当地について記録保存を目的とした発掘調査が着手された。

### 参考文献

今帰仁村教育委員会（編）1992年 『今帰仁城跡公園基本構想・基本計画書』 今帰仁村教育委員会  
今帰仁村教育委員会（編）2002年 『今帰仁城跡周辺整備計画書』 今帰仁村教育委員会

## 第2節 調査に至る経過

遺跡は国指定史跡今帰仁城跡の近隣に立地する。周辺地域に所在する遺跡の範囲確認を目的として、既に昭和59年度に試掘調査が行われている。このため当該遺跡の概要については周知されることである。しかし今帰仁村歴史文化センターの建設及び、平成4・5年度に駐車場やトイレなどが建設された際には当地が発掘調査されることは無かった。平成3年度に策定された今帰仁城跡公園基本構想・基本計画では当該地区に遺跡が広がっていることから、設置されたばかりのグスク広場について撤去計画を立案している。グスク広場をはじめとした諸施設は、遺構を考慮して現況地形を嵩上げし、遺跡全てを埋土保存している。その後、平成7年度には今帰仁村歴史文化センターが開館し、今帰仁城跡のガイダンス施設として来訪客を集めている。

一方、平成12年12月今帰仁城跡を含む県内9遺産が「琉球王国のグスク及び関連遺産群」として世界遺産に登録された。このことから、既設の駐車場では不十分であり前述したような既設駐車場の大規模な配置変更を含んだ整備計画が策定される。

これを受けて今帰仁城跡の周辺地域において大規模な開発計画が持ち上がり、平成15年3月6日付け今企振第911号において今帰仁村企画振興課から埋蔵文化財発掘通知書（57条の3第1項）が提出された。平成15年3月31日付け教文第2034号において沖縄県教育委員会より当該地域の土木工事等については、埋蔵文化財に影響を及ぼすと考えられるため、文化財保護法第57条の3の規定により、工事着手前に発掘調査を実施する旨「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」を受理。計画地域の周知の埋蔵文化財包蔵地（今帰仁城跡周辺遺跡）における発掘調査については、建設工事着手前に埋蔵文化財を対象とした調査が必要と判断された。

これを受けて文化財の取り扱いについて庁舎内で協議し、取り扱いについては村教育委員会で工事に先行して発掘調査を進める計画となった。しかし、遺跡の規模が大きく、発掘調査となれば数年以上かかることから、（平成14年度）現在の村教育委員会の体制では作業が難航することが予測された。そこで、平成15年度に体制の強化を目的に発掘調査を担当する職員を1人増員し以前より担当していた職員と合わせて調査員2人体制で発掘を進めることとなった。それでも、早期着工を目指す村の工事計画に沿って埋蔵文化財の発掘調査を推し進めるためには体制の不足は否めない。そこで、沖縄県教育庁文化課と4月に調整を行い、5月7日付け今教社文第46号において沖縄県立埋蔵文化財センター（以下埋文センター）に協力を依頼した。平成15年5月14日～7月25日の期間で行われた第3次調査については、埋文センターの協力のもと調査を進めることができた。

加えて、村では今帰仁城跡と今帰仁城跡周辺地域の整備を推し進めるべく平成15年9月1日

「今帰仁村発掘調査アドバイザー設置に関する規則」を施行。平成15年9月1日付発掘調査アドバイザーとして、教育委員会は金武正紀氏を委嘱、調査体制の拡充を図った。これ以降の調査完了までアドバイザーを配し、2人の調査員体制で調査に望んだ。また、平成15年度には3人、平成16年度にはを1人を調査補助員として臨時雇用している。これによっておよそ2年間にわたる今帰仁城跡周辺遺跡の発掘調査を遅延なく完了することができた。

### 第3節 調査要項

現場における発掘調査を平成15年度と平成16年度に実施し、出土品の資料整理及び報告書の刊行を平成16年度中に実施した（平成16年度繰り越しによって平成17年刊行）。発掘調査にあたっては安原啓示（今帰仁城跡調査研究整備委員長）、本中眞（文化庁記念物課）、玉田芳英（〃）、坂井秀弥（〃）、禰宜田佳男（〃）、島袋洋（沖縄県教育庁文化課）、金城亀信（〃）、中山晋（〃）、新垣力（〃）、安里嗣淳（沖縄県立埋蔵文化財センター）、盛本勲（〃）、當眞嗣一（沖縄県立博物館）、松川章（浦添市教育委員会）、安和吉則（〃）、仲宗根啓（那覇市教育委員会）、仲宗根禎（名護市教育委員会）諸氏からご指導ご鞭撻いただいた。記して謝意を表する。

#### 平成15年度 今帰仁城跡周辺遺跡発掘調査関係者

**事業主体** 今帰仁村教育委員会  
**事業責任者** 教育長 山城 清光  
 社会教育課長 諸喜田展生  
 今帰仁村歴史文化センター館長兼  
 社会教育課長補佐 仲原 弘哲  
**事務総括** 文化財係長 當山 清巳  
 文化財係 玉城 寿  
**調査担当者** 文化財係 宮城 弘樹  
 " 文化財係 玉城 靖  
 " 沖縄県立埋蔵文化財センター 専門員 知念 隆博  
 " 沖縄県立埋蔵文化財センター 臨時 新垣 力

**発掘調査アドバイザー** 金武 正紀

**調査補助員** 与那嶺 俊 仲里なぎさ 仲宗根 淳

#### 発掘調査作業員（五十音順）

新垣 正司	大城 恵子	大城 努	大城ヒデ子	大城 浩樹	嘉数ナヘ子
嘉数美保子	兼次 光春	金城 正洋	国吉 宏	古波蔵喜美子	島袋 一之
島袋 忠雄	城間 隼人	城間 宏子	諸喜田二光	新城 豊子	新城 康友
祖堅 弘子	玉城 京子	玉城 幸子	玉城 光則	田港 朝史	照屋 文子
仲宗根直美	仲宗根 淳	仲宗根文子	仲田トミ子	仲原シズエ	仲原美代子
仲尾次元太	仲尾次清治	野田 浩司	比嘉 達蔵	日高 寛人	平安愈美子
松田カルザード	松田 敏雄	宮里 初子			

#### 資料整理（五十音順）

安里 弘枝	上地嘉代子	上間 恵子	喜屋武春恵	金城千恵子	座間味桃代
鈴木 美和	澤岬亜有子	玉城千賀子	玉城 梨沙	玉城 美都	知念亜紀乃
仲尾次禮子	仲村あずさ	西谷麻希子	松本 綾子	山城 真理	与那嶺いずみ

## 平成16年度 今帰仁城跡周辺遺跡発掘調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会					
事業責任者	教育長	山城	清光			
	社会教育課長	諸喜田	展生			
	今帰仁村歴史文化センター館長兼					
	社会教育課長補佐	仲原	弘哲			
事務総括	文化財係長	當山	清巳			
	文化財係	玉城	寿			
調査担当者	文化財係	宮城	弘樹			
〃	文化財係	玉城	靖			
発掘調査アドバイザー		金武	正紀			
調査補助員	臨時職員	与那嶺	俊			
発掘調査作業員 (五十音順)						
	新垣 正司	大城ヒデ子	嘉数美保子	城間 宏子	新城 豊子	新城 光
	祖堅 弘子	玉城 京子	田港 朝史	照屋 文子	仲宗根直美	仲宗根 淳
	仲宗根文子	仲田トミ子	仲原シズエ	仲原美代子	仲尾次元太	
	平安兪美子	福居 慶	宮里 初子	金城慶一郎		
資料整理 (五十音順)						
	上間 恵子	鈴木 美和	玉城 美都	知念亜紀乃	仲里なぎさ	
	西谷麻希子	松本 綾子	与那嶺いづみ			

## 平成17年度 今帰仁城跡周辺遺跡発掘調査関係者

事業主体	今帰仁村教育委員会		
事業責任者	教育長	田港	朝茂
	社会教育課長	諸喜田	展生
	社会教育課長補佐	与那嶺	悟
事務総括	文化財係長	田港	朝津
	文化財係	玉城	寿
調査担当者	文化財係	宮城	弘樹
〃	文化財係	玉城	靖
発掘調査アドバイザー		金武	正紀
調査補助員	臨時職員	与那嶺	俊